

埋文にいがた

No. 74

2011. 3. 18

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

平成22年度発掘調査遺跡の紹介①

山崎遺跡

(柏崎市藤井字山崎1691-1番地ほか)

山崎遺跡は、柏崎平野の中央部、鱗石川^{さばいし}左岸の水田地帯に位置し、標高5.0m前後の扇状地先端付近に立地します。一般国道8号柏崎バイパスの建設工事に伴い、平面積3,975㎡を対象に平成22年9月から平成23年1月にかけて発掘調査を行いました。

古代・中世・近世の遺物が出土しましたが、主体となるのは平安時代(9世紀中葉主体)で、川岸に営まれた小規模な集落と考えられます。居住域の南～西側には、蛇行した自然流路(幅6.0～7.5m、深度約1.3m)が隣接しており、その一部から須恵器や土師器等がまともって出土しました。捨場として利用していたものと考えられます。捨場から出土した杯や碗の中には、底面に文字が墨書きされたものがあり、このような「墨書土器」が十数点見つっています。文字が判読できないものもありますが、一番多く見られる文字は「中山」で、現段階では地名ではないかと考えています。本遺跡から南東へ約2.7km離れた柏崎市箕輪^{みのわ}遺跡でも、同様の墨書土器が出土しており、その関連性も考える

必要があります。また右の写真にあるように、5枚の花弁と茎を一筆で描いた「草花文」も1点出土しています。須恵器の杯に絵を描いた墨書土器の類例は少なく、大変珍しいものです。

中世の遺構は少なく、調査区南端で溝が数条見つかった程度です。調査区の南側はまだ試掘調査等を行っていませんが、地形的に高所に位置することから、居住域が存在する可能性があります。また構築時期は古代か中世か不明ですが、埋土にブロック状の土を含む土坑が10基見つっています。県内でも同様の遺構は多く見つっていますが、その性格は不明のままです。本遺跡では遺構の集中部から離れた位置に存在することから、耕作に関わる遺構の可能性も考えられます。

(石川智紀)



墨書土器(須恵器杯)「草花文」



北区完掘状況(南東から)



ブロック状埋土の土坑(南東から)

平成22年度 発掘調査遺跡の紹介②

ろく たん だ みなみ 六反田南遺跡

(糸魚川市大字大和川字六反田地内ほか)

六反田南遺跡は、日本海から約250m内陸、^{うみかわ}海川右岸の沖積地に立地しています。北陸新幹線及び一般国道8号糸魚川東バイパスの建設に先立って、平成18年度から調査を進めています。これまでの調査で、3つの文化層（上・中・下層）があることが分かっています。22年度は、4月から1月にかけて、糸魚川東バイパス建設に伴う4つの地区、延べ約3,700㎡について調査をしました。『埋文にいがた』№72では、このうちのA1区とAP1区の上層について紹介しました。今回は、その後に調査を行ったKE1・KF2区の下層（縄文中期前葉）、A1・AP1区の中層（縄文中期中葉）、KE1区の上層（古墳前期）について報告します。

KE1区とKF2区下層の調査では、土坑・ピット・川跡などを検出しました。昨年までの調査も踏まえると、今回の調査区は遺構が希薄なことから、集落の縁辺部に当たる可能性があります。調査区の西半では土器が密集している範囲が多数見つかりました。出土した土器は、縄文時代中期前葉で北陸系の^{にんぎき}新崎式と呼ばれるものが多くを占めます。

A1区とAP1区中層の調査では、竪穴住居4軒のほか、土坑・配石などを検出しました。竪穴住居は、平面が隅丸方形・円形・楕円形のものがあり、規模は径3.5～5.9mです。住居の中央や、中央からやや壁寄りの位置に石囲炉が設けられていました。遺物は、縄文時代中期中葉で北陸系の^{かみやまだ}上山田・天神山式と呼ばれる土器が多く、東北系の^{だいぎ}大木式の土器も出土しています。珍しいものとして、三角^{いしがこいろ}罫石製品（三角柱状の石製品。用途は不明）が挙げられます。この中層は、昨年まで遺構が検出されなかったことから、遺物は洪水などによって運ばれてきたものと考えていましたが、今回、中層にも人々が居住していたことが明らかとなりました。

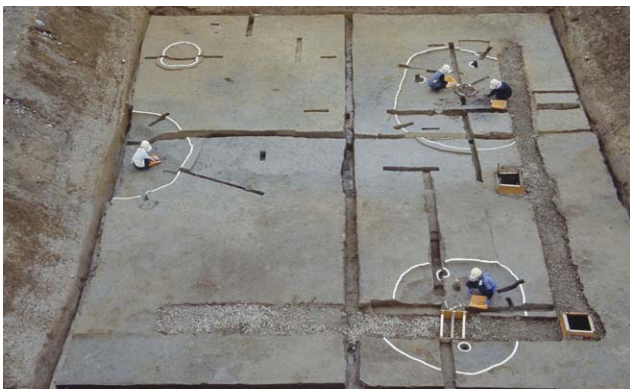
KE1区上層の調査では、古墳時代前期の掘立柱建物2棟・平地建物2棟のほか、溝・土坑・板杭・川跡などを検出しました。掘立柱建物は、いずれも桁行2間×梁行1間の規模です。このうちの1棟の柱穴には柱痕跡が残っているものがあり、太さ15cm以上の柱が使われていたことが分かりました。平地建物は、3～5m程度の長方形に溝を巡らし、その内側に柱穴が見られます。遺存状況のよい1棟は、4基の主柱穴をもっていました。また、川跡は幅1.8～3.5mで調査区を西から東へ蛇行しています。ここからは、おびただしい数の甕・壺・高杯・器台などの土器が出土しました。建物や土坑などはこの川跡の北側に多く分布していることから、集落の中心は川の北側にあったものと推測しています。

これまでも数回にわたって紹介してきましたが、六反田南遺跡は縄文時代から近世にかけて断続的に営まれた遺跡で、見つかった遺構・遺物も豊富であることから、当地域の歴史を解明するうえで貴重な資料になるものと期待しています。

(株)吉田建設 矢部英生)



KE1区下層（縄文時代中期前葉）北から



AP1区中層（縄文時代中期中葉）南から



KE1区上層（古墳時代前期）北西から

平成22年度 発掘調査遺跡の紹介③

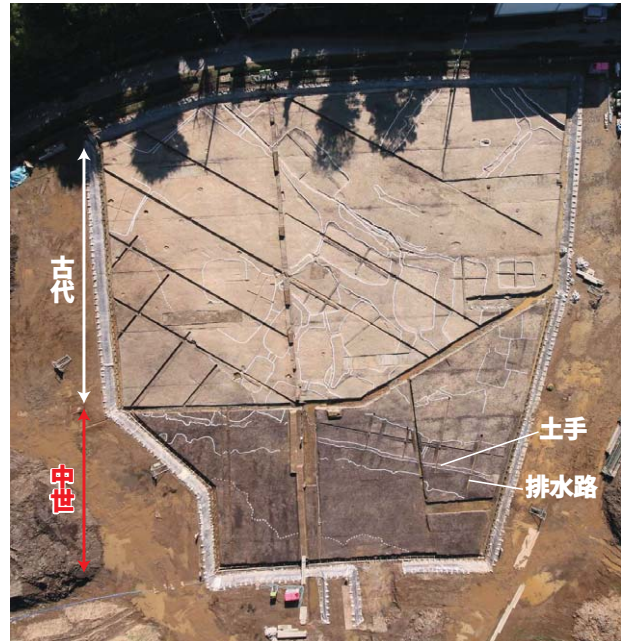
かみ みち した にし 上道下西遺跡

(三条市福島新田地内)

上道下西遺跡は、信濃川右岸沖積地の自然堤防上に立地し、標高は8m前後です。北陸自動車道栄スマートインター建設に伴い平成22年8月から12月に発掘調査を行いました。調査によって中世・古代・縄文時代の3時期の遺跡が見つっています。中世・古代では水田域を、縄文時代では晩期末の竪穴建物4棟や土坑を検出しました。今回は中世・古代の水田について説明します。

調査区は南東―北西方向に伸びる自然堤防の北東斜面地で、南西側に自然堤防微高地が、北東側に低地があります。微高地と低地の境付近には浅く幅の広い(1.8~3.6m)溝とそれに沿った土手状の高まりがあり、これよりも微高地側に水田域が広がっています。一方、低地側は土壌中に未分解の腐植が幾重にも交互に重なり合って堆積することから、アシなどが繁茂する湿潤な環境であったと考えられます。また、溝は水田の排水路と低地の植物が水田域へ進出することを防ぐ「根切り溝」としての機能を担っていたと考えられます。

古代の水田域には水田35枚、溝6条、土坑1基が見つかり、水田1枚の大きさは最小のもので19.44㎡、最大で63.0㎡と大きさや形は色々ですが、大きく見ると、微高地上の平坦面には大きな水田が、低地に向かう傾斜地には小型の水田が作られています。また、水田の中には地盤を数10cm掘り込んで作ったものが存在し、掘り込みは傾斜地ほど深く、また、小型のものが目立ちます。傾斜地での水平な水田(耕作)面確保のための工夫と考えられます。用水は調査区南側の最も高い位置にある数本の溝から取水したと見られ、水田を繋ぐ小溝で田伝いに水を巡らしていたものと考えられます。中世も同様な利水状況と想定されますが、水田造成に当たっては地盤への掘り込みがほとんどなく、微高地上は古代水田の窪地を利用し、傾斜地では土を盛り上げて細い畦を設けて水田を区画しています。このように中世の水田は古代の水田域におおむね重なりますが、造成の方法に違いが見られます。この違いがどのような要因によるものか、利水環境や地形などから検討していきたいと考えています。



調査範囲全景(上空北から)
(画面下の黒土の範囲が中世の遺構群、以外は古代の遺構群)



古代の水田(北東から)



土手(中央左)と排水路(中央)(東から)

保存処理室から

縄文時代晩期の編み物敷き土坑とクリの柱材 (胎内市野地遺跡)

野地遺跡は、胎内川右岸の胎内市大字八幡にあります。平成13年に行われた日本海沿岸東北自動車道建設に伴う試掘・確認調査によって遺跡の存在が明らかとなり、平成17～18年に本発掘調査を行いました。これらの調査により、掘立柱建物や竪穴住居、^{たてあなじゅうきょ} 抜歯人骨を埋葬した土坑墓、^{ぼっし じんこつ} 貯蔵穴、^{どこうぼ} 堅果類（クリ・クルミ・トチ）^{ちようけつ けんかうい} 集中範囲などが見つかり、多数の土器・石器・木製品（弓、編み物など）・漆製品が出土したことから、縄文時代後期中葉～晩期中葉（今から約3,500～3,000年前）に営まれた、この地域の拠点的な集落であったことが分かりました。

そして今年度、平成13年の試掘・確認調査時に取り上げることのできなかった木柱の回収を目的とした発掘調査を行い、残してきた木柱のほか、クルミ・クリの果皮などを廃棄した土坑や、加工痕のあるクリの丸木材、編み物（編組）などが見つかりました。

今回は、大量のクルミ・クリの^{かひ} 果皮や、木製品、土器、石器などが廃棄された縄文時代晩期の編み物敷き土坑の調査の様子と、加工痕のあるクリの丸木材についてご紹介します。



写真1 編み物敷き土坑が見つかった時の様子

編み物敷き土坑の調査

22年度の野地遺跡の調査で、底面に編み物が敷き詰められているフラスコ状の土坑（直径約120cm）が見つかりました。土坑本来の用途は、貯蔵穴、井戸など諸説ありますが、これらの機能を失った後、ゴミ穴として利用されたため、木製品や土器、クルミやクリの果皮がびっしり詰まった状態で見つかりました（写真1 白破線）。この土坑の隣には、直径約50cmの小さな土坑が掘り込まれており（写真1 黄破線）、この土坑の上面にも編み物の断片が見つかりました。編み物は、編み目が細かく脆いため、発掘現場でのクリーニングが困難であること、また土から引き剥がすとバラバラになってしまうことから、土坑を周囲の土ごと切り取って室内に運び、細部の発掘調査を慎重に行うこととしました。

土坑の切り取りには、住宅の断熱材などに利用される発泡硬質ウレタンを 사용합니다。ウレタンは、2液を混合するとカルメ焼きのように発泡し、土坑の凹凸にもしっかり^{じゅうてん} 充填することができるので、遺構や遺物を土ごと切り取る際によく利用します。切り取り範囲を残して周囲を掘り下げ、型枠と土の間にウレタンを流し込んで土坑全体を覆い（写真2）、ウレタンの側面から鉄筋棒を何本も打ち込んで地面から切り離し、発掘現場から運び出しました。

室内では、表面のクルミやクリを取り除き（写真3）、土坑内部に捨てられた木製品などの記録作業を行いながら、



写真2 土坑と型枠の間にウレタンを充填している様子

底面に敷かれた編み物まで、掘り下げていきました（写真4）。底面には、ヨシなどで編んだ編み物が敷かれ、土坑の中央部には敷き物の上にもう一枚別の編み物が見つかりました。もしかすると、土坑底面の編み物と土坑の口を塞ぐ編み物が2枚重なっていたのかもしれませんが。このほか、籠のような編み物も土坑の隅で潰れた状態で見つかりました。土坑内部の有機質遺物がこれだけしっかり残っていた例は、全国的に見ても稀少であり、縄文人がこのような土坑をどのように利用していたのかを推測する大変興味深い手掛かりが得られました。



写真3 土坑内部の室内発掘作業
（破線で囲んだ1/4は、上面のクルミを残した状態）



写真4 土坑底面に敷かれた編み物のクリーニング

建物の用材を管理栽培していた!?

今回の調査では、もう一つ、縄文人の生活を知る上で刮目すべき発見がありました。平成13年の試掘・確認調査時からその存在が確認されていた建物の用材（柱と見られる）です。この加工痕のあるクリの丸木材（直径約49cm、長さ5.8m、写真5）をきれいに水洗いし、植物学の専門家に見ていただいたところ、クリ材をこれだけ長く真っ直ぐに成長させるには、人が適切に管理する必要があることが分かりました。このことから、野地の縄文人は、建物に利用するため、まだ幼木のうちから枝打ちなどの管理を行い、真っ直ぐに育てていたのではないかと推測されます。これまで国内では、これほど長いクリの丸木材は見つかっておらず、縄文人の用材獲得の実態を解明する大変貴重な発見となりました。

野地遺跡よりもやや時期の新しい、縄文時代晩期終末（今から約2,500年前）の新発田市青田遺跡^{あおた}では、掘立柱建物の柱に利用していたクリ材の年輪を調査したところ、初期の成長が非常に早いことが分かりました。これは、縄文人がクリの周りの木や草を刈って日当たりを良くするなど、管理栽培していたためと推測しています。野地遺跡や青田遺跡の調査から、縄文人が私たちの想像以上に、積極的に自然に働きかけ、生活に必要な物資を計画的に獲得していた様子が見えてきました。

（三ツ井朋子）



写真5 加工痕のあるクリの丸木材

県内の遺跡・遺物72

したぐらやま

下倉山城跡(昭和52年3月県指定史跡)

(遺跡所在地:魚沼市下倉字滝沢)

下倉山城跡は新潟県の南部、魚野川と破間川の合流点に位置する権現山(標高225m)に築かれた山城です。城の近隣は、越後平野・会津地方(福島県)・上野(群馬県)・信濃(長野県)を結ぶ陸上交通及び魚野川水系の河川交通の結節点に当たり、これら交通路を一望できる場所にあることから見て、交通の要衝を押さえる軍事的拠点としての役割を担っていたことが分かります。

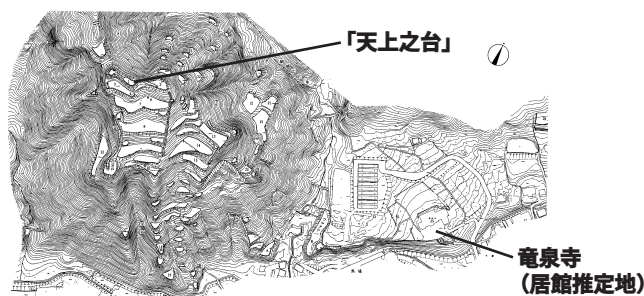
城は、大小70か所以上の曲輪(整地された平坦な場所)と土塁・空堀などから構成され、籠城の際に不可欠な井戸も2か所確認されています。曲輪などの遺構の中には、地元の言い伝えや古記録により呼び名が付けられているものもあります。主なものとして山頂の「天上之台」(狼煙台か?)、その南下段の「実城之平」・「箕之輪」・「みの木段」(主郭)、「遠見之平」・「横矢之段」(副郭)、「実城之井戸」・「権現ノ井戸」などがあります。

一方、城の東側山麓には竜泉寺(江戸初期創建)があり、土塁の一部が残ること、寺域がかつて「土居之内」と呼ばれたことから、平時に城主等が居住した「居館」が存在した場所の可能性があります。また、城の北東約400mには万福寺跡があり、建物の礎石や野積みめの石垣、参道などが残っています。この寺は城の鬼門に位置すること、城が廃絶された時期とほぼ同じ頃に廃寺となることなどから、城及び城主と深い関連性があったと推測できます。

城は、縄張りの特徴から、南北朝時代に遡る可能性がありますが、古文書等の記録に城と城主(城代)に関する記述が登場するのは、室町後期(戦国時代)の永正年間(1504~20年)以降です。これらの記録からは、この城を舞台とする数々の攻防戦があったことが分かります。天文2(1533)年、越後国守護上杉定実の一族上条定憲による「上条の乱」では、城主福王子孝重が、守護代長尾為景(上杉謙信の父)方に属し、籠城戦の結果、為景方の勝利に貢献したようです。また、上杉謙信の後継を巡る天正6(1578)年の「御館の乱」では、上杉景勝方の城主佐藤平左衛門秀信が籠城し、上杉三郎影虎方との攻防戦を繰り返しています。上杉氏が会津に移封後の慶長5(1600)年には、「関ヶ原の戦い」の前哨戦となる「上杉遺民一揆」が起き、一揆軍の攻撃によって堀秀治の家臣(城代)小倉主膳正政熙が討死にし、城は落城しましたが、すぐに坂戸城(南魚沼市)城主堀直奇により奪還されたと伝えられています。その後の城の様子や廃絶の正確な時期ははっきりしませんが、関ヶ原の戦いの後、各地での戦乱状態が終息したことにより、その軍事的役割を終え、廃城されたと考えられます。

城は平成16年の中越大震災と冬の豪雪により、曲輪・斜面の一部に亀裂や崩落等が発生しましたが、現在も戦国時代の山城の姿を良好に留めており、当地周辺を命懸けで駆け巡った戦国武士の想いや息吹を今日に伝えていきます。

(参考文献:『堀之内町史』通史編上巻1997ほか割愛)



遺構配置図(原埋蔵文化財調査報告第24集から転載)



遠景(南から) [写真提供 魚沼市教育委員会]

埋文にいがたNo.74

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail: niigata@maibun.net
URL: http://www.maibun.net
印刷 阿部印刷株式会社